

文化学園服飾博物館だより

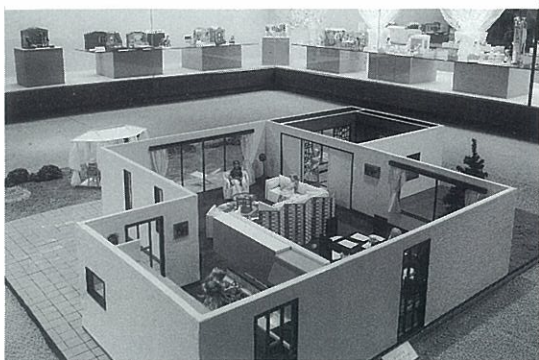
第 8 号 1995. 4. 1



『服飾の世界展』アジア・中米の服飾



『名家の装い展』三井高公・銀子夫妻、子供達の装い



『永遠のリカちゃん展』文化女子大学生の制作によるリカちゃんのおうち



『絹の都リヨン展』リヨンの紋織物

◇これからの服飾博物館◇

服飾博物館が開館してからすでに15年の月日が流れました。最初は膨大な収集品の整理に追われましたが、最近ようやく資料の全体像を把握できるようになり、それらをデータベース化し有効に利用する方法を模索する段階となりました。同時にこの間、収集の面では日本、西洋と並んでアジア部門の資料を充実させ一つの柱にすることができ、展示では博物館の名品『三井家伝来小袖』、『宮廷の装い』、『井伊家伝来能装束』の特別展を順次開催するとともに、種々の企画展、服飾全般に親しむ『服飾の世界』展、10年続く『旧ソ連邦民族衣装』展など次々と行なってきました。そして博物館を広く知ってもらうために、文化学園内、日本全国、そして世界へと様々な情報を発信してきました。

これからの目標として、データベース、防災体制と資料保存を完全にした収蔵庫の確保、資料に関する博物館らしい独自性のある研究など、時間のかかる課題において成果を上げることを望んでいます。さらに、博物館資料を大切に保存し展示に供するものと教育用に活用するものとに分け、後者を利用したスタジオ・ディールームないし資料室の開設、現代ファッションの収集とギャラリーの設置など、博物館活動と並行した組織作りなども必要となってくるでしょう。(学芸室長 道明三保子)

'94年度活動報告

◇展 示◇

【服飾の世界】 3月9日～4月28日

館蔵の服飾を地域別に幅広く紹介。「西洋」は19～20世紀の時代の流れを代表するドレス、帽子、バッグ、靴、扇などで構成しました。「アジア」は中国と韓国の宮廷衣装、インドネシア、フィリピン、インドの民族衣装、「中米」はメキシコの民族衣装など、「日本」は武家服飾と小袖を中心に展示しました。

【名家の装い ～明治・大正・昭和の三井家～】 5月20日～6月22日

江戸時代に呉服商と両替商を営み、明治以降は最大の財閥となった三井家の総領家（北三井家）より寄贈された服飾品を中心に紹介しました。展示品は10代高棟^{たかみね}夫人^{もとこ}苞子^{たかきみ}の明治時代の着物、高棟・苞子夫妻の大礼服、11代高公^{たかみ}夫人^{としこ}銀子^{たかきみ}の大正末から昭和初めの着物とドレス、高公・銀子夫妻の子供達の産着や祝着など。三井家の人々の生活が反映され、すぐれた美意識のもとに調製された服飾を興味深く鑑賞していただきました。



三井高棟・苞子夫妻の大礼服

【永遠のリカちゃん ～ファッションドリームと家族像～】 7月13日～10月7日

27年にわたるリカちゃんのあゆみを三つのテーマに分けて紹介しました。「リカちゃんのあゆみ」では、1代から5代まで変化したリカちゃんを中心に家族と友達を紹介。「リカちゃんのおうち」ではハウスやお店を人形と合わせて展開。「リカちゃんのおしゃれ」では流行服、ドレス、ユニフォーム、民族衣装を館蔵の資料と共に展示しました。リカちゃんに懐かしさをおぼえる年代から幼児にいたるまで熱心に見入っていました。文化学園内を対象に行なわれたデザインコンクール「リカちゃんの変身願望」も好評でした。1300点余りにのぼる応募デザイン画の中から30点を選び、実際にリカちゃんサイズで製作された作品はとても質が高く、ヘアスタイルから靴にいたるまで神経が行き届き、審査会では予定の5賞の他に3つ賞が増やされました。また、リカちゃんを通じた子供の家族や社会とのつながりをテーマにしたシンポジウム「リカちゃんにみるファッションドリームと家族像」や、リカちゃん評論家として知られる増渕宗一氏による講演会も併せて開催されました。



シンポジウム 左より長山洋子、林 泉、小島康弘、柳 洋子各講師の方々



デザインコンクール受賞作品 左よりグランプリ、小池千枝賞、中野裕通賞

【絹の都リヨンへ ～紋織の美と技をたどる～】 10月26日～11月30日

この特別展は、11月の文化祭に行なわれた文化服装学院のファッションショーに合わせ企画された展示でした。リヨンの絹織物の歴史や様式を詳しく紹介するため、当館所蔵資料の他にリヨンの装飾織物の老舗、タッシナリ・シャテル社とプレル社から紋織物裂を借用しました。またパリにあるフランス衣装芸術協会（U.F.A.C.）からは紋織地の服飾品を借用し、U.F.A.C.キュレーターのカミティス女史に資料の展示に協力いただきました。



イタリア・イギリス・フランスの紋織物

◇収 集◇

’94年度の主な収集品は次の通りです。

日本では昭憲皇太后御着用の御通常礼服をはじめ明治から昭和初めのドレスと仕事着やこぎん、西洋では18世紀前半の紋織物、1760年代のフランス風ロブ、19世紀中頃のカシミア・ショール、フォルチュニー、グレといったデザイナーのドレスなど、アジアその他の地域では、中国、インド、トルクメニスタン、アフガニスタン、トルコ、メキシコの衣装を購入しました。写真は、清朝第6代皇帝乾隆帝（1735～95）所用とされる儀式用の衣裳で、細かな綴織りによって皇帝のみが使用する明黄色の地に鮮やかな色彩で、五爪九龍と日、月、星をはじめとする12の文様と吉祥文様がちりばめられています。



龍袍（皇帝用吉服）中国 18世紀中頃（清代）

寄贈者および寄贈資料は次の通りです。中国：長着、羽織他、カシミア・ショール他、インドネシア・中国・ラオス・インド・マリ・グアテマラの民族衣装と民具、大正から昭和初めのドレス、長着、羽織他、打掛、掻巻、伊勢神宮式年遷宮祭に着用の衣冠、勅任官大礼服の帽、ナバホ族の機織の模型、コート他、西アジア女性用パンツ、大正天皇御着用着物、羽織、襪（敬称は略させていただきました）

収集にご協力いただきましたことに感謝申し上げます。

◇アジア民族文化フォーラム◇

11月15日服飾博物館において、アジア民族文化フォーラム’94西アジア年の一環としてコスチュームショー『西アジアの民族服』を開催いたしました。遠藤記念館の照明の美しいエントランスホールと、当館の赤い絨毯の階段を利用して会場が作られ、外務事務次官夫人、各国大使夫人、近衛甯子様をはじめとして、多くの方々をお迎えしました。文化女子大学と文化服装学院のモデルの堂々とした演技と、東京ウィメンズ・クラブの各国女性の楽しさ一杯の着こなしが融け合って、熱気あふれるショーとなりました。会場では貴重な歴史的衣装の展示も行なわれました。春から準備がスタートしましたが、最初はなかなか衣装が集まりませんでした。しかし、ヨルダン、トルコ、サウディアラビア、カタール各国の大使夫人はじめ、アジア民族造形文化研究所などの積極的な協力のお陰で、当館の着用可能な衣装と合わせて13か国50点が準備されました。前日にモデルの衣装を決定、当日リハーサルと、ごく短時間の準備で迎えた本番でしたが盛況に終り、その様子はNHKのテレビ、ラジオのニュース番組で放送されました。

また、これに関連したシンポジウムが11月12日は『西アジアの女性と伝統的衣服』、19日は『西アジアの民族服』と題して、文化女子大学を会場として、当大学博物館学芸員課程の協力を得て、9名の専門家を講師に迎え人々の交流に大いに役立ちました。



金糸の刺繍が美しいトルコの衣装



エントランスホールを埋めた200人余りの観客

'95年度展示案内

【庶民の服飾】 3月8日～5月12日

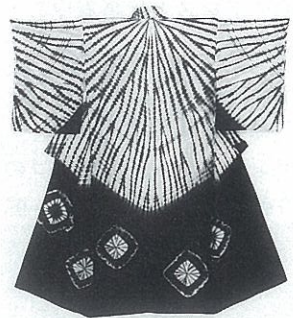
庶民の服飾は決して高価で贅沢なものではありませんが、生活に深く根ざした服飾としてみるべきものがあります。本展は明治～昭和初期を中心とし、日常着としての縞や緋の着物、仕事着(野良着)、晴れの服飾である子供祝着、祭衣装、大漁着などで構成いたしました。木綿や麻を材料とした縞や緋の染織の素朴な味わい、衣料を大切に^{ききおり}する刺子、裂織や寄せ裂の技法、祭衣装や大漁着の力強さを感じさせる模様染めなどをご鑑賞下さい。

【中国の服飾】 6月10日～9月14日 (8月1日～16日は夏期休館)

中国最後の王朝となった清朝は中国東北地方の満州民族によって築かれました。その衣服は裾にスリットの入った長衣に筒袖、馬蹄形の袖口といった特徴がありますが、文様には漢の影響が強く表われています。本展では紋織物や精緻な刺繍に彩られた清朝末期の宮廷衣装を中心に、漢族女性の衣装やモンゴル、チベットなど中国周辺諸民族の服飾を合わせて紹介し、服飾に見る文化の影響と融合をたどります。

【西洋の服飾】 10月13日～12月8日

18世紀から現代までの装いを、女性の衣装のスタイルの流れを中心にたどります。18世紀ロココ時代のドレスから、19世紀のエンパイア、ロマンチック、クリノリン、バスルスタイルのドレス、20世紀のアールヌーボースタイルから現代のデザイナーのドレスにいたるまでを帽子、バッグ、靴なども含め幅広く展示していきます。教科書の中だけでは感じることでできない等身大の西洋服装史として紹介します。



浴衣(絞り染)



バスルスタイルのドレス(1878年頃)

【第9回「旧ソ連邦民族衣装」】 '96年1月11日～2月16日

「旧ソ連邦民族衣装」は1986年より開催されているもので、これまでに極東地方、バルト三国、ヤクート、ブリヤート、ウクライナ、トルクメン、アルタイ、バシキールの各共和国の民族衣装を紹介してきました。今回は9回目となりますが、取り上げる共和国については未定です。

*以上の予定は都合により変更されることがあります。

利 用 案 内

【開館時間】 平日：午前10時～午後4時30分／土曜日：午前10時～午後3時(入館は閉館の30分前まで)

【休館日】 日曜日・祝日・年末年始・夏期休暇／学園の創立記念日(6月23日)／展示替の期間

【入館料】 一般300円・学生200円(20名以上の団体は一般200円・学生150円) 特別展は別料金

※文化学園の職員・学生は無料。また職員が同伴する方も無料。

文化学園服飾博物館だより 第8号

編集・発行 文化学園服飾博物館
〒151 東京都渋谷区代々木3-22-1
TEL.03-3299-2387